小　論　文

【設問】資料 1 は，移動通信システムの第五世代，すなわち「5G」について解説した書籍の一部である．この資料を読んで以下の設問に答えよ．

資料 1 の出典：岡嶋裕史，“「移動」が贅沢品になる世界へ”，5G 大容量・低遅延・多接続のしくみ，講談社，第 6 章，コラム 6，pp. 221-223，2020.

設問 1

資料 1 で説明されている内容を 200 字以内(句読点を含む)で要約せよ．

設問 2

資料 1 を踏まえて，5G などの技術は人々の選択肢をどのように広げるのか，あなたの考えを 400 字以内(句読点を含む)で記述せよ．

「移動」が贅沢品になる世界へ

10年以上前に出版した本で、「移動は贅沢品になるかもしれない」と書いたことがありました。そのとき念頭に置いていたのは、環境破壊です。飛行機も船も電車も車も、多かれ少なかれ環境に悪影響を及ぼします。

環境破壊が現実問題として進行し、社会を構成する人の意識が、それではまずかろうと思う方向で収束をみれば、移動に制限がかかると思ったのです。それも情報通信システムについての書籍でしたから、かなりの仕事はネットワークを通して執行できるようになり、観光すらもVRやARで体験できるようになると予測しました。

デジタル技術はいろいろなものを、安く高精度にコピー可能にし、それでCD業界や出版業界に打撃を与えました。そしてVRは体験をコピーする技術です。今のところVRでコピーされた体験はプアですが、高精度になればリアルの観光やリアルのイベントに打撃を与えるでしょう。

そうなると、生身の体が実際に動くようなクラシックな形での移動は、富裕層の嗜好品か、宅配などの専門事業者だけが行う特殊なアクティビティになるのでは――と予想したのです。

2019年にグレタ・トゥーンベリ氏が台頭し、flying shame（飛行機に乗るのは意識低くて恥）などのムーブメントも拡大したので、あながち間違ってはいなかったと思うのですが、移動が手の届かない贅沢だとまざまざと感じさせられたのはコロナウイルス禍でした。

治安や物流、交通など、どうしても実体の移動を伴わなければならない仕事を除いて、それ以外の移動は実に贅沢な行為になりました。それまでは、大して本人確認の役にも立たないのに、何となく誰かの権威を目に見える形にするための儀式のように、あるいは単なる惰性として行われていた捺印などは、あっさりとしなくていいことになりました。

紙の質感や対面の肌感覚が大事なんだよ、などと言われ、なかなかデジタル化が進まなかった教育や医療も、遠隔で実施していいことになりました。社会の規程があっさりと書き換わりました。

私は怠け者で、やらなくていいことはなるべくやりたくないですし、休日は外に出て行くよりは家でゲームをしていたほうが嬉しいので、この変化は本来歓迎すべき種類のものです。実際、せっかく整えられた遠隔授業や遠隔医療の体制が、コロナ禍終息以降も継続するといいなと思っています。

でも、自分では選ばないかもしれないけれど、移動する自由は回復できるといいと考えています。

移動は、贅沢品であり続けるかもしれません。

それは、コロナウイルスはそうそう根絶されたりしないよ、何年もいろいろ自粛するんだよという意味ではありません。多くの人が「移動なんて、あんまりしなくても社会は回るぞ」と気付いたからです。

会議も決済も授業も医療も、情報通信を使った遠隔作業で済むのであれば、そのまま移動の水準を抑制すれば環境負荷は削減できるでしょう。感染症に強い社会もたぶん作れます。なんとなく移動しにくい雰囲気が醸成されるかもしれません。

実際、5Gのような高速大容量な通信技術が世界をカバーすれば、かなりの移動は代替できてしまうと思います。それで生産性が高まるのも、環境負荷が減るのも賛成なのですが、移動が富裕層の嗜好品になってしまうのであれば、寂しい気はします。

5Gをはじめとするテクノロジーは、人の選択肢を狭めるものではなく、広げるものであってほしいからです。「移動することも」選べる社会が戻ってくるといいと思います。